

航空業における異常環境等を起因物とする死傷災害発生事例（2017年）

2017年発生月	時間	死傷災害発生事例	年齢	労働者規模
3	12~13	乗務中、着陸に向けた準備をしていたところ両耳がつまり、抜けなくなり、両耳共に強い痛みも発生した。	33	500~999
5	12~13	乗務中、機内後方通路（座席35Cと35Hの間の通路）にて、カートを使用したドリンクサービス中、突然の縦揺れが発生し、カート上のポットなどを手で押さえたところ、右頸筋から肩に掛けて違和感を感じた。直後に痛みは発症せず、痛み止めを服用しながら乗務を完遂した。その後、しばらくして右頸筋から肩にかけて強い痛みが発症した。	23	—
6	10~11	降下中、着陸へ向けて前方ギャレーで片付けをしていた時、両耳が詰まり抜けなくなった。両耳共に痛みがあり、バルサルバ法を試みたが改善されなかった。当日は鼻づまり、耳づまりはなかったため乗務したが、鼻水と咳が出ていた。	33	500~999
7	7~8	当日は咳と鼻水の症状があり、二日前に診療を受け、処方された薬を服用していた。乗務中、上昇時は右耳に閉塞感があったが耳抜きが出来ていた。巡航中も右耳に閉塞感があり、降下開始後、接客中に耳抜きが出来なくなり、両耳が塞がった状態になった。数回バルサルバ法で耳抜きをしては塞がるという状態を繰り返した。到着後は降下中ほどの閉塞感はなく、右耳が詰まっているような違和感があった。二便目も同じ状態で、全体を通して痛みは感じなかった。勤務終了後に受診し、中耳炎の診断を受けた。	27	500~999
7	12~13	乗務中、機内巡回をしている時に、降下開始に伴う気圧の変化により、突然左右の耳が徐々に詰まり出した。到着後も右耳は詰まったままであったが、上昇中の気圧の変化で耳抜きが可能かもしれないとのことで、次便も乗務したが、結局一	29	500~

		度は抜けたものの右耳は詰まりが取れず、音も聞こえにくい状態であったため受診したところ、航空性中耳炎と診断された。		999
7	18～ 19	乗務中、上昇中は特に違和感はなかったが、降下開始後に機内の前方ギャレーにいたところ、両耳からゴーゴーと音が鳴り、同時に両耳が詰まった。その後、両耳に痛みを感じ、ほぼ聞こえなくなった。鼻をかんだり、顎を動かしたりしてみたが耳は抜けなかった。着陸後、痛みはなくなったが両耳は詰まった状態だった。なお、数日前より風邪の症状があり薬を服用しており、当日は鼻水が少し出していた。	30～	500 999
9	11～ 12	客室巡回中に揺れが発生、急いで着席しようと自席に向かう途中で揺れが大きくなり、客席にもたれかかった際に腰をひねった。	38～	500 999
9	2～3	日本時間早朝に、コックピット左席に着席し、シートベルトを着用の上、操縦業務を行っていた際に、高度FL350にて巡航中に気象データから予測及び回避不可能かつ強い揺れとの遭遇。突然の揺れに対する体の保持と同時に速度の変動に対する為のMCP speedの操作、スラストレバー、スピードブレーキの操作、シートベルトサインの点灯の指示の行為を瞬時に行う過程で腰に負担がかかる、その時点で腰に違和感が発生した。	48～	1000 9999

出典：https://anzeninfo.mhlw.go.jp/anzen_pgm/SHISYO_FND.aspx(職場のあんぜんサイト)

Return to：https://www.jisha.or.jp/international/topics/202206_11.html